

資料 8 「キーカムの家と乞食の子ども達」

ハインリッヒ・プレーレ『子供と民衆の昔話』 1853年 ライプツィッヒ

‘Kiekam's Haus und die Bettelkinder’ Heinrich Pröhle “ Kinder- und Volksmärchen“

訳：岡部由紀子

キーカムという名の男がいて、家を造った。土台は砂糖で、壁は香辛料と砂糖入りのクッキー、窓は蜂蜜入りのケーキ、屋根はラスクでできていた。

そこへ小さな乞食の男の子と、小さな乞食の女の子がやってきて、その家を食べた。かれらがその家にやってくると、「わたしをかじっておくれ、かじっておくれ」と家はしゃべった。

ところがあるとき、キーカムがラスクの屋根の上で子ども達を捕まえて、池に投げ込んでしまった。

子ども達は、池からはい出してパン焼き窯のところへやって来て、ずぶぬれだったので体を暖めた。するとパン焼き窯は、「パンスコップを使っておくれ。パンスコップを使っておくれ。センメルが焼け焦げそうだ」と、いった。そこで乞食の子供たちは、パンスコップの板をさっと窯の中につっこみ、たくさんのセンメルをその上に乗せた。

しばらくすると、一頭の牝牛がやってきて、こう叫び続けた。「乳を搾っておくれ。乳を搾っておくれ。ミルクがあふれ出しそうだ。」そこで、乞食の子ども達は牝牛の乳を搾ってやり、センメルパンを砕いてミルクの中に入れ、ミルクとパンと一緒に食べた。

かれらは満腹し、ずっと満腹で、今も満腹で、死ぬこともなく、まだ生きている。

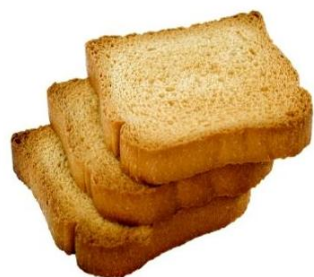
訳者注：プレーレはヤコブ・グリムの教え子で、この話は師の依頼で収集したハルツ地方の民話のひとつ。



香辛料と砂糖入りのクッキー (Pfeffernüsse)は、レープクーヘンに似た菓子。現在は、蜂蜜ではなく砂糖を使う。

Pfefferは胡椒の意味だが、中世には東洋からやってきた香辛料の総称であった。胡椒を使う場合もあるが、主にシナモン、ナツメグ、クローブなどを入れる。

センメル(Semmel)は、小麦粉から作られた小型の白パンで、上流階級の食べ物だった。18世紀半ばにウィーンで作られ、マリア・テレジアも食べていた。当時カラス麦やライ麦からできた黒パンを食べていた民衆にとってはご馳走。



ラスク(Zwieback)は、17世紀イタリアで作られた。

日持ちをよくするために、白パンを小片に切ってから焼き、水分を少なくする。旅の携帯食であった。